

山形大学附属博物館報 12

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY 1985. 12. 1

目 次

中国と博物館	(1)
博物館考	(2)
新任の挨拶をかかえて	(4)
ハイマツの樹下、「りんねそう」はひっそりと咲いていた	(4)
資料紹介—日本最初の人造絹糸資料—	(6)
昭和60年度特別展「中条家文書展」及び公開講演会	(6)

中国と博物館

館長 大津 高

中国が広いことは地図を見れば明らかであり、先輩たちからもつねづねそのように教えられてきた。が、実際に訪ねて見て改めてその壮大さに驚いた、ということは即ち私の想像を超えていた事になる。国土の面積は日本の26倍で、東経73°から135°まで、つまり西はインドのほぼボンベイから、東は日本の総路付近まで広がり、その距離5000kmをこえ、東京ハワイ間に近い。その中には日本の8～9倍の人民が住み、社会主義国家となって以前に比べ貧富の差はなくなり、文明文化の恩恵に浴する度合も互に相近づいたとはいえ、国土があまりにも広大なため、地方辺境の生活は不便なことは否めない。住民の90%は漢族といわれるが、東北や南西部の辺境には多数の種族が住みつき、その数50を超える。それぞれの言語・風習を保持し、国家もその保護につとめていた事は、以前の各国の植民地と異なるといえず、自国語をおしつけた政策と違つて極めて心地よい。

そしてこの国は、北京原人という50万年前の人類化石や遺跡をもち、また最近発見された雲南の猿人の化石は何百万年前のもので世界最古といわれ、その明らかな歴史も堯舜以来4300年、エジプトと共に世界最古のものである。しかしその間には幾多の国家がこの地に成立・滅亡し、ある時は統一国家として栄え、ある時は分立国家となり互に相争った。その主流をなした民族も漢族に限

らず、幾多の種族が支配・れい属を繰返し、また東西異民族の競り争い・侵略を受けた事も歴史の教える所である。従つてその文化は自国の各種族によるものの外、仏教に伴うインドのもの、シルクロードを経た西欧のもの等多彩であり、そして今、我々は中国の博物館でそれらの一端を伺い知る事ができるのである。

凡そ博物館なるものは、世界のあらゆるものを集めるわけにはゆかないし、もし集め得たとしてもその管理や検索にかかる労力の巨大さに比べその存在意義は少ない。従つて一般に博物館はそれぞれ個性をもち、またその国によつても特徴があるのは当然である。例えば大英博物館は、広く各地に植民地を持ち、それを根拠地として集めた世界中のものがあるからあらゆる分野を包含し、かつての栄光国家の博物館として世界に冠たるものがある。一方フランスのルーヴル博物館は美術博物館で芸術・文化の都パリの華である。アメリカは国家独立後200年、大陸発見以来の歴史にして6300年たらずであるから、ニューヨーク博物館は自然史を主体にしたものである。しかし発祥の地としての航空博物館は大規模なものが数多くあり、その他の分野では、その富に任せて諸外国から買い集めたものを収蔵展示しているにすぎないものが多いのは、致し方ない事であろう。

それに比し中国の博物館は独自のものが多い。即ち国土が広く民族・住民が多く物産が多様多岐で豊かであるからである。特に歴史的なものは各年代の国々の興亡につれて瞭目すべきものがある。が、私の訪中は数回にすぎず、とても批評する資格はないので、今回はその2～3の感想をのべて

みたい。

先ず故宮博物館は以前の王宮紫禁城で、極めて廣大壯麗なものであるが、中にはここを王宮とした明清二代のものが殆んどである。台北郊外の故宮博物館を見て、その広汎題大な資料に驚き、本家の北京を期待して行った私は多少失望したが、それもその筈、第二次世界大戦後の中国の政変で国民党の蒋介石が台湾に退く時、国内の主だった博物館の収集物を殆んど台湾に持ち去ったからである。従って台北の故宮博物館は、その内容が質量共まさに大中国の博物館を示すもので、それについてはいつか述べる機会もあろう。しかし中国は広いので、台湾に持ち去られなかったものや、その後の収集物で各地に立派な博物館が出来ている。

大陸の博物館で、最も強い衝撃を受けたのは西安郊外の秦始皇陵近くにある兵馬俑である。幅80～90m、長さ100m余の体育館を思わせる鉄骨かまぼこ型の建物の中は、大皇帝の軍団が肅々と整列した姿そのままに地中から現れているのである。その兵士は等身大といわれるが、彼等は体格がよく我々よりずっと大柄で6000体以上ある。その一体一体が形も容貌もそれぞれ異なり、鋳型で作ったものでない。最前列は年輩で厳めしい目をした将軍達、その後にこれも等身大の馬、実物大の戦車、そして続く武器に身を固めた何千という日を見開いた兵士の列を見て私はただ圧倒され、之を作らせた皇帝の偉大さに深く打たれた。

もう一つ驚異の目を眩ったのは湖南省長沙市の馬王堆博物館である。もともとこの湖南省は実に豊かな風土で、山が遠く氣候が暖かく少し雨が少ない事を除けばこの山形とさして変らない。その主都長沙は毛沢東主席の出生地も近く、その為か汽車の駅はすばらしく立派だ。その郊外ごく近い所にこの博物館がある。その展示物は何といっても著名な女性の遺体で、初老の年ごろに見えるが身長154cm、近ごろのひ弱な女性と違い実に堂々たる体格で、とても湯殿山あたりで見られるガラ干しかガイ骨状のミイラと異なり、生き生きと眠っており、とても死後2100年も経ているとは思えない。またその墳墓から一緒に出土した種々の遺物、農作物等どれも一つ一つ驚異的で興味が尽きなかった。

これら中国の博物館を見て、交通便利なこの時代に、何も大英博物館のような万物網羅の博物館は必要ないと思った。その土地土地を背景にした

個性ある博物館こそ、これからどしどし作られるべきだと思った。そして中国は正にそれを実行しており、どこの小さな町へ行ってもそれなりの博物館があるようである。

(理学部 教授)

博物館考

大川 健嗣

今年も二度ほど海外研修に出る機会があった。5月の中国東北部（旧満洲）への旅と6月中旬～7月上旬の西ドイツとイギリスへの旅である。

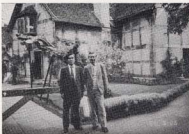
中国東北部は初めてのことであり、ハルビン・吉林・長春の5月は思いのほか凄じ暑い季節で、ハルビンの大河松花江では、緯度が山形よりはるか北に位置しているにもかかわらず、時まさに水と戯れる季節になっており、一早い夏の到来に世界の広さを知らされ、驚かされました。

またヨーロッパは二度目であるが、イギリス行きは初めてでだけに、オックスフォード大学での学会終了後の農村部視察が大いに楽しみであった。7月26日午後、オックスフォード市内でレンタカーを借り、5泊6日の日程で、われわれは国内一周の旅に出た。同行者は、東京大学の柴垣和夫教授と東北大学の岡本友孝教授の二人である。コースとしては、文豪シェークスピアの生地とされるストラットフォードに始まり、ヨーク、スコットランドのエジンバラ、ウェールズのウィングダーミアに泊り、これら各都市や周辺の農村部を眺めながら7月1日には再びオックスフォードに戻り、その日の夕刻にはロンドンに到着する予定であった。

ところで、私は専門が農業問題及び地域経済論であるから、当然最大の関心事は自ずと限定されてくるわけだが、既して旅にはハブニングがつきものであり、その意外性との出会いこそ、言い換えればいわゆるカルチャーショックとの遭遇こそが旅のすばらしさであると常々考えているひとりである。今となっては海外での旅も結構多くなったが、どの旅でも後悔したことはない。異文化との触れ合いは、その途の専門家ならずとも大いなる感動を受けるものである。したがって、行く先で観る各種の博物館や古城の見学は実に楽しかった。6年前に海外農業調査で訪れたフランスのロアル川沿いの古城群は、フランス有数のワイ

ン産地にあり往時を偲ばせていた。ヨーロッパでは城もまた博物館として広く公開されている場合が多い。たとえばオックスフォードからほど遠からぬところにあるブレンハイム宮殿などもそのひとつである。ここは第二次世界大戦時にイギリスの首相として活躍し、後に彼の有名な『第二次大戦回顧録』を残したウィンストン・チャーチル卿の城として名高い。

われわれは、第1日目はストラトフォードに宿をとった。ここは文豪シェークスピアの生家が大切に保存されており、国立シェークスピア劇場を持つ人口2.5万人の小さな町である。したがって当然ながらここにはシェークスピア記念館があり、衣裳をはじめ各種の貴重な資料が展示され、シェークスピアの生家と共に保存されている。この町最大のホテル名も「シェークスピア・ホテル」であった。まさにシェークスピア一色といった感があつた。シェークスピアの生家には、彼が使つたといわれるベットがあつたが、今日のわれわれからみるとシェークスピアなる人物の身の丈が意外に小ぶりであつたようである。シェークスピアが特別に小さかつたのではなく、どうも当時のイギリス人は概して小ぶりだつたのではなかつたか。家の造りそのものがそれを想像させるサイズであつた。こんなことも、こうして現地に行つてみて自分の背丈と比較してみ始めて言えるセリフである。これも前述の意外性のひとつである。



シェークスピアの生家の前にて
東大・柴垣教授と筆者

ところで、イギリスは一国であつてひとつではない。これは実際にイギリス国内を見聞して実感である。なぜなら、ウェールズ地方に入った途端、道路標識や看板、教会の印刷物に至るまで、上にはウェールズ語、下は英語で、まさに二

ヶ国語の表示がされている。イングランド、ウェールズ、スコットランドの三国のまさに連邦国家なのである。スコットランド銀行がイングランド銀行と共に発券銀行の地位を保持し続けていることからわかる。とはいえ、イングランドが今日では政治・経済・文化等あらゆる分野での国の中心地には違いない。しかもイギリスの場合、とりわけ政治・経済面では首都ロンドンに集中されすぎているくらいがある。さらに文化面でも同様でなかでも大英博物館 (British Museum) の存在は余りにも有名であり、これを見ずしてイギリスを語る資格はないとさえ言われている。



大英博物館内

われわれの日程には時間的余裕がなく、ほんの半日、全くの駆け足で観ただけであるが、さすがにそのスケールの大きさに度胆をぬかれた。私しばしば訪れる中国の博物館や道跡のスケールも比類なき大きさであるが、この大英博物館にはまたエジプト、ギリシャ、ローマはもとより世界中の貴重な文化遺産が集集され保存されているだけに実にすばらしい。

しかしながら、この世界最大の博物館たる大英博物館にしても、また1日ビザで入国した東ベルリンにあるベルガモン博物館 (トルコの古都ベルガモンの遺跡を集めた博物館) にしても、はたまた彼の有名なパリのルーヴル博物館にしても、陳列物それ自体はどれをとっても文字通りまさに人類の遺産であるには違いないが、ところがこれらをじっくり見入っているうちに、どうしてもある種の不快感を禁じ得ないのはなぜだろうか、そう感ずるのは私だけではなさそうである。つまり、考えてみればこれらの民族的文化遺産は、「戦争」の名の下に正当化された「略奪文化」そのもので

ある。もっともこうしたことは、一人ヨーロッパ文化だけに言えることではなく、どの国にも大なり小なり当てはまることではあろう。文化遺産と戦争の宿命のとも言うべき関わり合いを見た想いがして、ある種の割り切れなさを感じながら帰国の途についた。

ともあれ、イギリス2千キロの旅でもっとも強烈に感じたことは、ヨーロッパ諸国のいわゆる「ストック文化」の重みであった。確かに日本にもそれなりの文化が蓄積されてきており、誇るべきものも多かろう。しかしながら、どこか大きく違うものを感じる。それは、拠点都市と言わず、地方都市と言わず、それなりの文化遺産が大切に保存されて今日へ至っていることへの感動である。輸入文化にそれほど抵抗感のなくなってしまった今日の日本と比べた場合、建物にしる色調にしる頑固なほどに伝統を守り続けているのはなぜなのだろうか。いささか大げさに言えば、中世の街並を最先端のファッションをした若者達が行き交っているといった表現の方が案外当たっているかも知れない。私にとってみれば、そうした街並そのものが博物館であったと言ってもよい。尽きることのない魅力がヨーロッパにはある。

(人文学部 教授)

新任の挨拶をかねて

松尾 剛次

私は、このたび博物館運営委員を仰せつかった松尾剛次です。教養部で歴史学を担当しています。専門は日本中世仏教史、特に鎌倉新仏教です。「新任の挨拶をかねて何か書いて欲しい」との依頼をうけたのですが、正直いつて困っています。というのも、私が単に筆無精だからだけではなく、もともと「博物館」なるものが好きではないからでもあります。よく、古くなったら博物館行き、といわれるように、「博物館」という言葉から、古い物の集積場をイメージするからですし、東博や奈良博といった一流といわれる博物館にしても、そのイメージを変えてくれなかったからです。専門がら、博物館の仏像コーナーには、よく行くのですが、そこに行くと、本来のあるべき所から切り離された物の集合、いわば、古いもぎとられた手や足等の集積があるという感じがしてなりません。

仏像コーナーの一体の薬師如来を例にとれば、それのもと置かれていた薬師堂と、その前で薬師経を読む僧、その僧の講読を聞く信の人々等によって構成される一つの体系から切り離された薬師如来は、想像力の貧困な私には、先述の如き、いやな感じがするのです。こんな私ですから、博物館運営委員を仰せつかった時にはびっくりしましたし、山大博物館の宣伝をするこのパンフレットへの執筆を依頼された時も困惑したのです。

しかしながら、運営委員を仰せつかった以上はそんなことを言っておられないわけですし、むしろ山大博物館をより良いものとするべく努力すべきであることは言うまでもないわけです。そこで、私の抱負を述べますと、先述した博物館の欠点(かなり不可逆的なことですが)をできるだけなくすべく努力したいということになります。すなわち、収集にしても陳列にしても、できる限り部分を全体から切り離さないように配慮したいということです。先述の薬師如来像の例で言えば、その像を安置した薬師堂の写真や薬師経の写真、薬師信仰の解説等々を、薬師如来のそばに配置するのは一つの方法でしょう。

ところで、最近聞いたところでは、ゼートコースの一つとなっている博物館もあるそうですが、それは到底無理としても、男女交際のきっかけを作るような、換言すれば、学生その他の人々が行ってみたいくなるような博物館にしたいと思います。そのためには、総合博物館をめざすよりも、予算の少ない当館のとるべき道は、よく言われるように、個性ある博物館への道でしょう。以上のような抱負をもって、博物館運営に努めたいと思います。

(教養部 助教授
附属博物館運営委員)

ハイマツの樹下、「りんねそう」は ひっそりと咲いていた……

山崎 裕

「りんねそう」の名を初めて耳にする者は、仏教の経典にでも出てくるであろう植物をイメージするのはなかろうか。ところが「りんねそう」は「輪廻草」ではなく、「Linné 草」なのである。分類学を大成したスウェーデンの学者 Carl von Linné (1707~78) を記念した命名である。この植物は我が国固有のものではなく、ヨーロッパやシ

ベリア、アラスカなど寒冷地に広く分布するものであるから、西洋人の名が付いていても不思議ではない。ちなみに英名はTwinflower（「双子花」）、独名は Erdkrönchen（「大地の小さな冠」）仏名は Linnée である。学名は *Linnaea borealis* であり、これを Linné 博士を記念したものである。

ここで是非ともこの植物を自分の目で確かめてみたくするのは人情である。ある人物の性格を写真だけから知ることが不可能のように、植物もまたその自然の姿に出会わなくてはどんな植物か知ることは出来ない。山形県では朝日連峰などの高山にその分布が確認されている。

私は月山にその姿を尋ねた。「りんねそう」の生育地の一つは南斜面のハイマツ帯にある。美しいビリディアン・グリーンのカバーの下は決して平坦ではない。凸凹の多い地面には大きな岩石がごろがり、樹木を痛めない様にしている歩行は困難なものである。強風と深雪のためかハイマツはきれいに地表を被った状態で茂っている。その樹下約10cm位の地表から隔絶された部分が彼の偉大なる分類学者の名を預ける植物の生育空間である。

私はまるで猿の毛織いの様にしてハイマツを掻き分け、私はついにその姿に出会うことが出来たのである。「りんねそう」は淡いピンクの美しい花を対にして、麓から吹き上げる涼風を受け僅かに震えていた。その可憐な姿は小さな樹下のおとぎの国に咲くに相応しく、さっきまで小人達が此処で輪を作り踊っていた錯覚さえ、否定できない気持ちに私をするのであった。

「りんねそう」は「にわとこ」や「つくばろうつぎ」などと同じ「忍冬（すいかざら）科」の極めて小型の低木である。「りんね草」であっても「木」の仲間なのである。茎は地を匍匐し、1cm位の葉を対生につける。夏季には5cm程の花茎を立ち上げ、漏斗状鐘型の花を下向きに必ず2個ずつつける。長野県以北の高山及び北海道、千島に分布する。

山形大学附属博物館には1953年7月、吾妻山にて採集された標本・1点が収蔵されている。自然公園内での植物採集がおよそ不可能である今日、これは貴重な標本である。

偉人の名前が広場や都市の名称となって後世に残された例をわれわれはいくつか思い出すことができる。同じ様に植物も人物の名前を与えられたものがある。

時は昔、源平最後の攻防、一ノ谷の合戦における熊谷次郎直実と平政盛の悲しい物語は共に蘭科の「くまがいそう」、「あつもりそう」としてその名を植物図鑑に連ねている。Philipp Franz von Siebold（1796～1866）が彼の恋人「お滝さん」の名を「あじさい」の学名（*Hydrangea macrophylla* var. *Otakia*）に残した例は、その命名法の学問的賢否は別として、あまりにも有名な話である。また植物学者の名前が植物名に記念された例も多い。牧野富太郎博士（1862～1957）の名は「まきのすみれ」、「まきのごけ」に残されているし、「おやまりんどう」（*Gentiana Makinoi*）のように学名として、*Makinoi*, *Makineanus* などを用いている植物も数種に及ぶ。植物図鑑をじっくり調らべれば、もっと沢山の人物に出会う事ができるはずである。

話しは「りんねそう」に戻る。近年、高山植物の濫獲や登山者による生態系の破壊が頻りに話題にのぼる様になった。事実、尾瀬の様に自然破壊が深刻になっている所も少なくない。幸いにして東北の高山はまだ自然のままである。しかし、年々登山者は増え、それに対する規制も中部山岳なみの厳しいものになるのは時間の問題であるという。これから先、この天然を今日同様自由に享受できる方法はないものであろうか……。

ハイマツ樹下の不思議の国の「りんねそう」は、いつまでも荒らされずにひっそりと咲いてほしいものである。

最後に、「りんねそう」の生育地を案内して下さった月山山頂小屋の芳賀竹志氏に感謝いたします。（大学院理学研究科研究生）



りんねそう

Linnaea borealis L.

1984. 8. 1, 山形県月山山頂付近にて

資料紹介

日本最初の人造絹糸資料

中澤 勝 磨

当館には、明治から大正・昭和初期にかけて、山形県の伝統的地場産業の一つとして栄えた、米沢織・長井織・山形織・山辺織・鶴岡織の織物資料が集取・保存・展示されている。このうち、我が国の織物史上、特に、注目すべきものに、我が国で最初に製造された¹⁾人造絹糸織物があることである。この資料は、恐らく、我が国繊維工業上、歴史的に現存する唯一の人絹資料であると思われる。

人絹が日本で初めて製造されたのは、大正年代の初期、米沢市の帝国人絹株式会社館山工場で、旧制の米沢高等工業学校（現山形大学工学部）教授であった、秦逸三氏によってである。秦氏は広島県出身で、一高から東大工学部応用化学科に進み、明治41年卒業し、その後しばらく役所勤めをしていたが、大正元年から旧米沢高等工業学校に勤め、人造絹糸の研究に取り組んだが、当時その製法が秘密にされていたため、研究は苦難の道を迎えねばならなかった。そこで、大正5年から大正7年まで欧米に出張して人絹の製法について研究視察し、帰国後、米沢の館山工場でその製造をはじめたのである。それが順調に進み、製造される製品も優良なものとなり、需要も急激に増加し海外にまで輸出されるようになった。秦氏は、我が国におけるビスコース法人絹製糸を發明しその国産化に尽力した功績によって、昭和3年藍綬褒章を与えられた。その後、秦氏は広島県の帝国人絹株式会社社長として赴任したため、米沢工場は昭和6年11月をもって閉鎖され、操業16年の歴史を閉じた。

(註) 1. ビスコース (Viscose) 木材パルプを苛性ソーダで処理し、これに二酸化炭素を加えて製した粘質物の水溶液で、人造絹糸・セロファンの原料。

2. ビスコース人絹 ビスコースを金または白金の紡糸口金の細孔から硫酸及び硫酸塩の水溶液中に射出して凝固させた人造絹糸のこと。

(附属博物館学芸員)

昭和60年度特別展「中条家文書展」及び公開講演会

特別展「中条家文書展」は、「中世武家文書」の形式と内容に触れ、中世、荘園における惣領制相統形態について理解を深めることを目的に、下記の内容で開催された。

1. 期 間 昭和60年10月28日(開)～11月8日(閉)
2. 展示資料

ア. 所領安堵に関する資料

- ・後醍醐天皇論旨 ・大塔宮護良親皇令旨
- ・鎌倉将軍家源頼朝政所下文 ほか13点

イ. 讓 状

- ・津村足讓状 ・三浦和田茂連讓状 ほか12点

ウ. 寄進状・起請文・系図及び家譜

- ・上杉輝虎血判起請文 ほか系図等4点

そのほか、関係資料として中世古文書様式一覧・用語説明、参考文献等を展示。

なお、特別展期間中の11月2日(出午後1時30分より)、教育学部教授 横山昭男氏による「戦国から近世へ ―上杉氏の移封をめぐる―」と題する講演が行われた。

昭和60年度学芸員資格取得のための博物館実務実習実施者

学 部	視修者数	合 計
人 文 学 部	43 人	67 人
教 育 学 部	10	
理 学 部	14	

昭和59年度見学者総数

一 般 成 人	個 人	407 (人)
	団 体	39
大 学 生	個 人	302
	団 体	371
児 童 生 徒	個 人	5
	団 体	21
合 計	個 人	717
	団 体	431
	総 数	1,145

山形大学附属博物館 612 1985, 12, 1, 発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
(〒990) 山形市小谷町1丁目4-12
☎0236-31-1421 (F) 2921